

「黒石健太郎物語」

くろいしけんたろう

これより、江田五月原作、神田紅脚色による、「黒石健太郎物語」の一席、時代も人物もクロスオーバーにて、よろしくお付き合いのほどお願い致します。

時代は江戸、元禄15年12月14日、月はかわれど日は同じ亡君浅野内頭匠のご命日。あの、赤穂義士が討ち入りを致しました。元禄15年に、ところは中国山地の奥深い、美作みまさかの国で、おじいさんとおばあさんが力を合わせて、大きな黒い岩を運んで来て、ドッコイショと川に流しました。

このお爺さんは剣道の達人で、姓を宮本、名を武蔵、号してはじめさん。お婆さんの名前は、おつうと申します。

婆「お爺さんや、この黒い岩は川をドンブラコドンブラコと流れて行って、小さな黒石になり、きつと世の中を変えるシンボルになりますよ」

爺「そうだな。わしのように強い意志を持った、正義の若者の手に拾われることだろう」

かくして黒い大岩は、急流に押し流され、川の中の岩に何度もぶつかりながら、いだいに磨かれて行き、宝物のような黒い基石となつて、岡山県下の各地に散らばつて行きました。

光陰矢のごとし、時はめぐつて昭和59年1月、岡山県の県南に、1人の赤ん坊が元気な産声を上げました。オギヤーオギヤーオギヤー！

洋服屋を営む父親は、わが子のために真新しい産着うぶぎを用意し、息子を目を細めて見つめておりましたが、ハッと致します。

父「おい母さん、この子、手に何か握りしめてるぞ」

母「まあ、何でしょう」

見れば、ピカピカ光る黒い石。そこには「志こころざし」と言う字が、くつきりと浮き出ておりました。

母「あなた、この子はあの八犬伝の犬士達のように、弱きを助け強気をくじく、志を持った正義の人になるんじゃないかしら」

父「そうだな。とにかく心も体も健康に育つように、健太郎と名づけよう」

かくして、健太郎と名づけられた赤ん坊は、「テイーケーカンパニー」を経営する両親の元で、すくすくと育ちます。

富山小学校、朝日塾小学校を卒業するや、
淳心学院中・高等学校には岡山から遠い道のりを通います。とにかく賢い子供で、

梅檀は双葉よりもかんばしの例えどおり、一を聞いて十を知り、十を聞いて、百を知り、百を聞いて千万・億を知り、奥の隣は台所。

あ、これは私の家の間取りでございます。やがて東京大学法学部政治コースに進み、卒業後は、リクルートに入社。

企業の人材発掘支援に日夜励んで、社会の課題解決事業「ホンキの就職」を立ち上げては、奔走しておりますが、ある日、リーマンショックが我が国に襲いかかって参りました。

若「黒石くろいしさん、僕はまだ働きたいのに、会社からリストラされてしまいました。何とかし

て下さい」

若「私も、あっさり首です。次の仕事が見つかりませうん」

働きたくても就職先がない、この惨状を目の当たりにして、「義を見てせざるは勇なきなりと、後ろ鉢巻たすき十字に綾なし、袴の股立ちを高々ととりあげた黒石健太郎」

29歳でリクルートを退社するや、若者の起業を手助けする会社、「ウィルフ」創業。

若者が描いた夢をかなえられない国になつてはいけなないと、ひたすら著書「渋谷で教える起業先生」を出版して、応援を続けておりましたが、しかし、どうがんばっても政治の壁にぶつかってしまいました。「政治を変えねば、何も変わらない」そう思った健太郎は、東大の先輩でもある、岡山の長老・江田五月大老の下へ行き、

健「江田大老、今や政治が地に落ちております。このままでは『石が流れて木の葉が沈んで』しまう世の中になってしまいます」
これを聞いて江田大老は大きくうなづきます。

江「そうよのう。都には、安倍の悪麻呂あくまろという宰相さいしやうがおつての、親の七光りをいいことに、今やしたい放題じゃ。ところで黒石君、今も君は黒石を大切に持っておるのか」

健「はい、この通り。いつも握りしめておりまする」

江「おお、確か浮き出していたのは『志』と言う字だったのう」

健「はい、私は『志』をモットーに、人にやさしい政治を目指したいのです」

江「よかろう。わしはすでに隠居を決めた身の上、君のその澄んだ黒い瞳にかけようではないか。志の一字をもつて、この世の中を『石は沈み木の葉はは流れる』、当たり前前の世の中にもどしておくれ。これからは私の後継者となるがよかろう」

この言葉に石黒健太郎は、目をまん丸くして驚きます。

健「ハハ、有難き幸せ。江田大老のお考えには、いつも共感しておりました。名を汚さぬよう、この岡山の世界一の底力をもつて、

必ずや活力ある経済につないで参ります」
江「よう言うた。一同、健太郎に続けー」

江田大老が号令をかけますと、

時は、平成28年5月、黒石健太郎くろいしけんたろうの元に
集まったる面々は、柚木桃太郎ゆのきみちよし、津村つむら
金太郎けいすけ、まだ玉手箱を開けていない
高井浦島太郎たかいたかしをはじめと致して、岡山おかやま
県下各地けんかかくちから、老若男女ろうにやくなんによ、天下同憂てんかどうゆうの同志た
ちがぞくぞくと駆けつけて参ります。

さらに、柚木桃太郎ゆのきみちよしが「犬、サル、
雉、行くぞ！」と声をかければ

♪そりや進めそりや進め、一度に攻めて攻め
破り、つぶしてしまえ安倍あべの城。エイエイオ
ー、ワンワン、キャツキャツ、ケーンケーン。

健太郎けんたろうの軍団がひとたび動けば、「健太郎が
来るぞ」「健太郎が来たぞ」「健太郎が見えた
ぞ」と、口々に叫ぶ人々の声が沸き起おこりま
す。同士たちの手の中にも、志の黒石がしつ
かりと握り締められておりました。

かくして健太郎は、いよいよ参議院戦へ乗
り出します。

健「一同、我に続けー」

ピシーリ一鞭加えるや、ハイヨー、パッパッパッパッパッパッパッ

馬声を助くる力声手綱さばきもあざやかに

乗り出だしたるその有様は、げにや鞍上人あんじょうな

く鞍下あんかに馬なく、尾筒おづつは煙の如くにこんとん

として砂煙、土煙をたて疾風のごとくに駆け出だしたり。

それ君に遅れてならじと後に続いた面々は、

柚木桃太郎ゆのきみちよし・津村金太郎つむら啓介けいすけ、高井浦

島太郎たかし、その後おつうに続くは、おつうの子

孫かと思われる、土井のおたかの方たちをは

じめと致して、いずれも黒石を手にした面々、

仁義礼智忠信考悌、先を競って御共なす。

時に、江田五月大老の呼びかけに、民進党

岡山県連さるとびの猿飛佐助さすけこと高橋とおるを筆頭に、

自治体議員の面々が、かねてかたえの竹やぶ

に用意なしたるロウエンダン、口火をつけれ

ば、ぴゅータンタン、紅白二段こうはくにだんのろしを合

図にゴーンゴーンガングングングング

ガング。打ち鳴らしたる早鐘に、かねて待

機の黒石くろいしの郎党、すわや君のご出馬なりとて、先を競って先を競ってはせ参じたり。

岡山県岡山市のピュアリテイまきびに駒を乗り上げし黒石健太郎くろいしけんたろう、馬足を留めて振り返り見れば、群がる同勢三千余人いずれも黒石に志を染めぬいたる健太郎の旗へんぽんとひるがえ翻し、ひしめき合いたる有様は、さながら雲か霞とまごうばかりなり。

健太郎、諸足をあぶみよりはずし、両の手を鞍の山形につかえ、

健「さてもおのおのには微力なるこの健太郎にお味方下され忝く、略儀ながらこれにて御礼申し上ぐ。ついては、軍事に賢き、安倍の悪麻呂まろの事なれば、先手にいかなる伏せ勢あるや計り知れず。にわか集まりしことなれば、同士討ちなどして物笑いの種残しては相ならぬ。合言葉を定めおかれよ」

下「かしこまっております。してその合言葉の儀は」

健「されば、参院選挙と問わば、勝ちと答えよ。参院選挙」

下「勝ち。恐悦にござりまする」

健「押せー」

ばらり振り切る采配と共に、ドン、エイエ
イエイ、オウオウオウ、一鼓六足の調子を整
え三千の同勢を引き連れ、時は平成28年7
月10日難攻不落の参議院選挙に初当選を果
たします。

その後、健太郎の働きで、安倍悪麻呂に対
抗する大きな軍団が出来上がり、ついには安
倍退陣へと追い詰める。

この様子を見て、江田五月大老は、「でかし
たでかした」と、涙にくれたと申します。

「黒石健太郎物語」の一席、これをもつて
読み終わりと致します。